

# 幼稚園及び保育園における巡回相談と 保育者ストレスに関する研究

## A Study of Childcare Worker's Stress and Itinerant Consultation in Kindergartens and Nursery Schools.

大谷 優実  
人文科学研究科  
臨床心理学専攻  
Yumi Ohtani

Graduate School of Humanities Division of Clinical Psychology

### 要 約

本研究では、巡回相談と保育者ストレスの関係性を検討することを目的とした。関東圏内の幼稚園及び保育園に勤務する保育者と管理職の計100名に質問紙調査を行った。結果より、巡回相談の有無による保育者ストレスは、下位尺度の「子どもの対応・理解によるストレス」に有意な差が見受けられた ( $t(97)=5.03, p<.01$ )。また、巡回相談の頻度ごとみていくと、半年に1回以上巡回相談が来ている園は、年に1回以下の園より、「子どもの対応・理解によるストレス」が低いことが見受けられた ( $F(4, 94)=6.90, p<.01$ )。本研究の結果より、巡回相談の関わりは保育者にとってポジティブな変化をもたらしていることが明らかとなった。今後は、見出された巡回相談に対する要望や課題を改善していくことで、保育者にとって役立つ巡回相談の支援体制を構築していくことが求められる。

【Key Word】 保育者 ストレス 巡回相談

### I 問題と目的

#### 1. 保育者の現状

近年、保育ニーズが多様化する中、幼稚園教諭や保育士（以下、保育者）の勤務環境は厳しくなっており、その心身の負担は増加している（安達，2001；山城・上地・嘉数，2005）。さらに、精神健康状態が不良である保育者ほど、子どもの特性に応じた保育行動がなされにくいと述べられている（島崎ら，1996）。保育者のストレスに関しては、既に多くの調査がなされてお

り、保育者のストレスが高いことが示されている（赤田ら，2009；石川ら，2010）。

#### 2. 巡回相談について

##### 1) 巡回相談の定義

保育者に対して、専門的な援助活動を行うのが巡回相談である。文部科学省（2015）より、巡回相談の概念は「指導上の助言・相談が受けられるよう専門的知識をもった教員・指導主事等が、幼稚園を巡回し、教員に対して、障害のある幼児、児童、生徒に対する指導内容・方法に関する

指導・助言を行うこと」と定義されている。また、厚生労働省（2017）では、巡回支援専門員とし、「発達障害等に関する知識を有する専門員が、保育所等の子どもやその親が集まる施設・場を巡回し、施設のスタッフや親に対し、障害の早期発見・早期対応のための助言等の支援を行います。」と類似する定義がされている。

なお、巡回相談の定義についての研究は複数あり、その中で巡回相談の捉え方は、大きく2つに分けられている（鶴，2012）。

第1は、「巡回訪問を制度面・実態面から捉えるもの」である。最も引用されている定義が、「専門機関のスタッフが保育所を訪問して、子どもの保育所での生活を実際に見たうえで、それに即して専門的な援助活動を行うこと」（浜谷ら，1990）である。保育者とは異なる専門職が、子どもの生活を見たうえで、専門的な援助を行う制度または活動として捉えている。これらは、巡回相談が各自治体で、その制度内容が異なるため、実態から定義づけたものが多いと考えられる（鶴，2012）。

第2は、「巡回相談をコンサルテーションとして捉えるもの」である。保育者が保育の状態が適切かどうかを判断する時にアセスメントが参照され、保育方針を作成する時に助言が参照されるという構造（浜谷，2005）となっている。その結果、保育者は心理的に安定するとともに、意欲的に保育実践に取り組むことができるようになると述べている。

本研究では、文部科学省及び厚生労働省の定義に最も近く、どの地域にも当てはまるものとして、第1の「巡回訪問を制度

面・実態面から捉えるもの」を用いて行う。

## 2) 巡回相談の実態

文部科学省（2016）の調査により、近年の巡回相談の活用状況は増加傾向にあると掲載されている。しかし、巡回相談は各自治体によって目的や実施内容は異なる（園山・由岐中，2000）こと、巡回する頻度が様々である（文部科学省，2016）ことがあげられる。また、巡回相談は心理職・臨床心理学研究者が最も多いが、その他に言語聴覚士、理学療法士、精神科医、保育士など（五十嵐，2010；鶴，2012）と、有する資格は担当によって様々であり、支援方法においても多様性があると考えられる。

保育者が巡回相談を利用し、子どもの心身の発達を支援していくために、巡回相談の在り方を検討することは必要である。

## 3. 目的と研究の意義

そこで本研究では、「保育者ストレスは巡回相談の頻度によって変化するのではないか」という仮説を立て、検討を行う。調査に用いた質問紙をもとに統計的に分析を行うことで、巡回相談と保育者ストレスの関係性を検討することを目的とする。

文部科学省（2016）は、巡回相談の活用状況は増加傾向にあるとしているが、その頻度は地域によって様々である。現在の保育現場の問題としては、統合保育や保育者の離職、人材不足の深刻化などがあげられている（宇佐美・西・高尾，2015）。保育ニーズが多様化する中、保育者の勤務環境は厳しくなっており、その心身の負担は増大している（安達，2001）。メンタルヘルスの向上には、職場環境における保育者のストレスを把握することが非常に重要であ

る(赤田, 2010)。保育現場における巡回相談の頻度や関わり方を調査することによって、様々な定義がある巡回相談のあり方をより明確化し、巡回相談員と保育者との協働関係の検討を可能にすると考えられる。また巡回相談員と保育者との良好な関係により、保育者への支援にも役立つと推察される。

## II 方法

### 1. 調査協力者

関東圏内の幼稚園及び保育園に勤務し、研究協力の同意の得られた保育者と管理職140名に行った。

### 2. 調査日時

調査は、平成29年6月から平成29年8月に行った。

### 3. 実施方法

質問紙の所要時間は15～30分程度とした。配布してから1～2週間後に研究者が回収する、もしくは返却用レターパックを用いた園からの返送を依頼した。なお質問紙は、以下のように構成された。

### 4. 質問紙の構造

#### 1) フェイスシート

フェイスシートでは、協力者の年齢、性別、職種、勤務歴を尋ねた。

#### 2) 保育者ストレスを測る尺度

- i) 保育士ストレス評定尺度(赤田, 2010) : 6下位尺度の全29項目からなる尺度。回答方法は5件法を用いた。1がストレスが最も低く、5が最も高いとして、測定した。
- ii) バーンアウト尺度(北城, 2009) : 2下位尺度の全21項目からなる尺度。得点が高いほど「消耗感」尺度は、

バーンアウトの傾向が高くなり、「達成感」尺度は、バーンアウト傾向が低くなる。回答方法は5件法で、「ない」を1、「ほとんどない」を2、「ややある」を3、「よくある」を4、「いつもある」を5として、測定した。

### 3) 巡回相談について

巡回相談に対して期待することを、選択または自由記述にて回答してもらった。なお、巡回相談無しの園には、巡回相談があると仮定して同様に回答を求めた。

### 4) 園長先生に記入して頂く質問項目

園長先生には別途、園の構造(職員の人数、園児の人数)、園内の発達障害の診断を受けている児の有無、巡回相談の頻度、巡回相談がもつ資格、巡回相談の主な関わり方について回答してもらった。

### 5. 分析方法

分析は以下の通りである。

- ・フェイスシート結果 : 記述統計
- ・巡回相談の有無による保育者ストレス得点の平均値の差 : t検定
- ・巡回相談の頻度による保育者ストレス得点の平均値の差 : 一要因の分散分析
- ・その他の質問項目 : 内容分析

### 6. 倫理的配慮

本研究は跡見学園女子大学文学部臨床心理学科の倫理委員会審査において承認を受けた(受付番号:17008)。

## III 結果

### 1. フェイスシート結果

質問紙が回収できた100名を分析の対象とした(回収率71.4%)。協力者の内訳は、13園(幼稚園4園、保育園9園)の

表1 各園の構造

	園名	頻度	園児人数	診断を受けて いる園児	職員人数	回収人数
巡回相談有り	A 幼稚園	2ヶ月に1	117	0	1	1
	B 幼稚園	半年に1	482	7	14	14
	C 幼稚園	月4	98	0	7	6
	D 保育園	月1	71	0	12	9
	E 保育園	月1	62	1	18	5
	F 保育園	月1	?	0	16	9
	G 保育園	年1	22	0	3	3
	H 保育園	年1～2	15	1	9	5
巡回相談無し	I 幼稚園		158	1	11	9
	J 保育園		74	0	12	10
	K 保育園		45	0	10	8
	L 保育園		65	0	12	12
	M 保育園		89	0	14	8

内、巡回相談有りが53名（幼稚園22名，保育園31名），巡回相談無しが47名（幼稚園9名，保育園38名）であった。また，男女比は女性が96名，男性が3名であった。年齢については20代前半が32名，20代後半が24名，30代が25名，40代が8名，50代が9名，不明が2名と，20代前半が最も多く，半数以上が20代という結果となった。

勤務歴は，1年目が26名，2～3年目が20名，4～6年目が25名，7～9年目が12名，10年以上が11名，不明が6名という結果となった。なお今回の勤務歴とは，現在の園での勤務歴とした。約半数が勤務歴3年であり，10年以上勤務している保育者は11%と，少ない結果となった。

## 2. 園長先生からの回答

各園の構造は表1の通りとなった。巡回相談員の所有する資格については，臨床心理士が4園，特別支援教育士が1園，不明が3園であった。また，以前は言語聴覚士，保育士，保健士が巡回していたという回答もあった。

また主な関わりとしては，①午前中（1

～2時間程度）対象の子どもの園での様子を観察，②午後の会議にて「気になる子どもへの関わり方や支援方法のアドバイス」とどの園も同様の回答であった。また「保護者への面談」と回答のあった園が1園あった。

## 3. 巡回相談の有無と保育者ストレスの関係

t検定の結果を図1に示した。保育士ストレス評定尺度得点及びバーンアウト下位尺度の消耗感尺度得点と達成感尺度得点ともに，巡回相談の有無による有意な差はみられなかった（保育士ストレス評定尺度： $t(97)=1.23$ , n.s./消耗感尺度： $t(97)=.44$ , n.s./達成感尺度： $t(97)=.17$ , n.s.）。また，保育士ストレス評定尺度の下位尺度である，「子どもの対応・理解のストレス」得点には，巡回相談の有無による有意な差がみられた（ $t(97)=5.03$ ,  $p<.001$ ）。

## 4. 巡回相談の頻度と保育者ストレスの関係

各尺度得点を従属変数，巡回相談の頻度

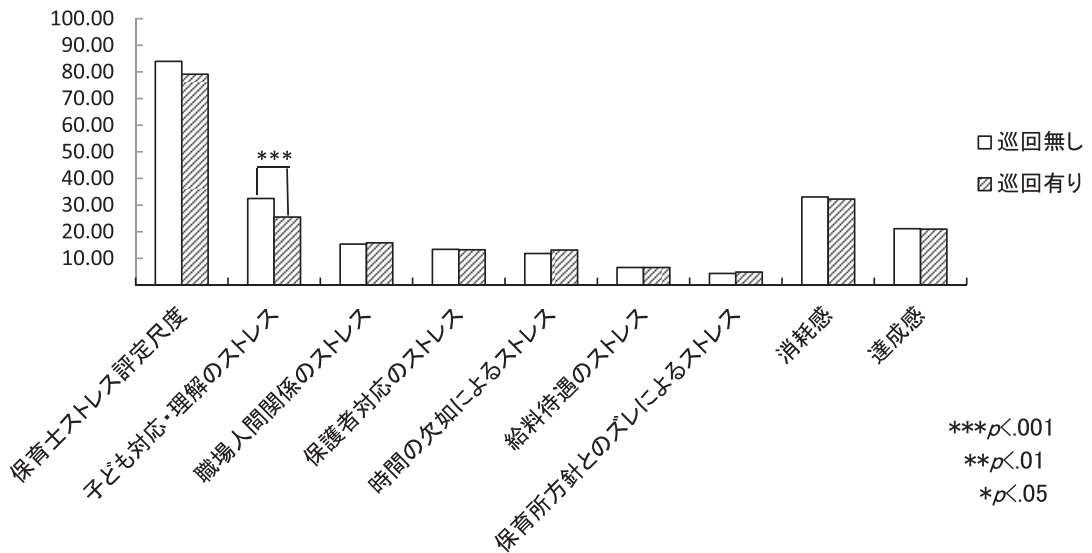


図1 巡回相談の有無による保育士ストレス評定尺度得点及びバーンアウト下位尺度の消耗感尺度得点と達成感尺度得点の差 (n=100)

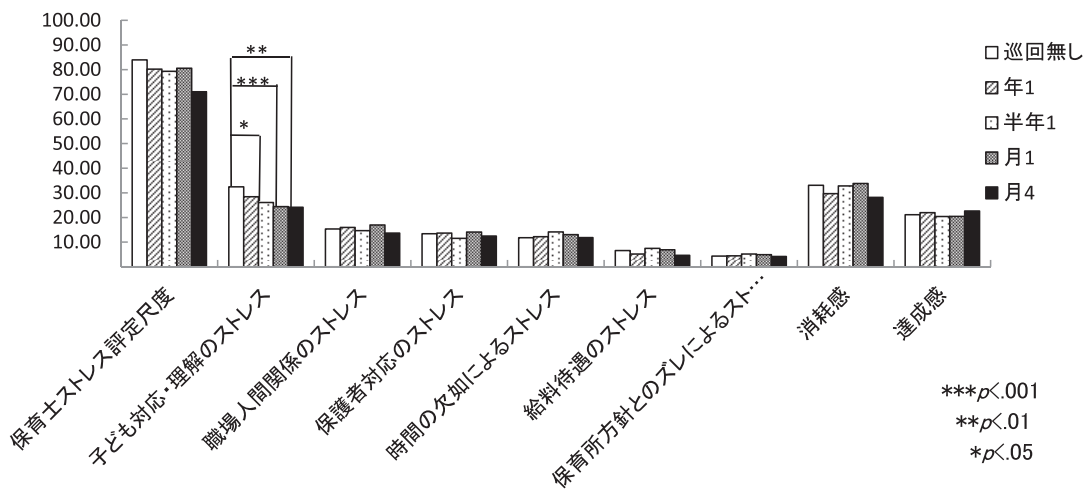


図2 巡回相談の頻度による保育士ストレス評定尺度得点及びバーンアウト下位尺度の消耗感尺度得点と達成感尺度得点の差 (n=100)

を独立変数とした一要因の分散分析の結果を図2に示した。結果より、保育士ストレス評定尺度得点及びバーンアウト下位尺度の消耗感尺度得点と達成感尺度得点ともに、頻度による有意な差はみられなかった(保育士ストレス評定尺度： $F(4, 94) = .66, n.s.$ /消耗感尺度： $F(4, 94) = .74, n.s.$ /達成感尺度： $F(4, 94)$

$= .38, n.s.$ )。また、保育士ストレス評定尺度の下位尺度である「子どもの対応・理解のストレス」は、頻度による有意な差が見受けられた( $F(4, 94) = 6.90, p < .001$ )。

さらに、「子どもの対応・理解のストレス」は、巡回頻度が増えるごとに平均値が減少した。TukeyのHSD法による多重比較



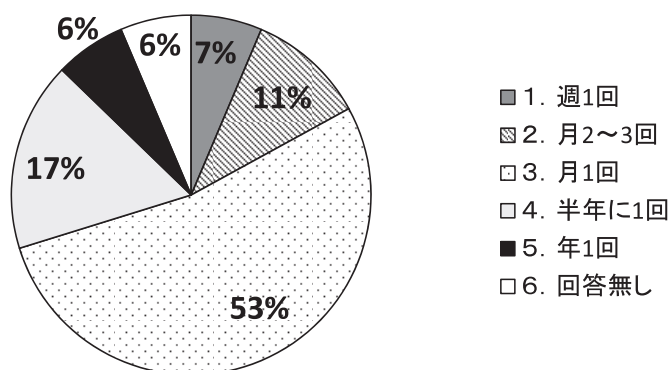


図3 巡回相談無しの園が希望する巡回頻度 (n=47)

を行った結果、「巡回相談無し・半年に1回」、「巡回相談無し・月に1回」、「巡回相談無し・月に4回」では、5%水準で有意な差がみられた。

## 5. その他の質問項目

### 1) 巡回相談無しの園へのアンケート内容

#### (1) 巡回相談の認知度

まず、巡回相談について「巡回相談は、発達や心理の専門家が地域の幼稚園や保育園に赴き、発達や行動について気がかりのある子どもたちや、保護者の対応、職場で生じる様々な問題についての相談やコンサルテーションを行う制度です。これらを踏まえたうえで、以下のアンケートにお答えください。」といった説明を加えた。

「あなたは巡回相談というものを知っていましたか？」についての結果は「1. はい」と回答があったのが22名(45%)、「2. いいえ」27名(55%)と、半数以上の保育者が巡回相談の存在を認知していないことがわかった。

#### (2) 巡回相談の頻度の期待値

「あなたの園に巡回相談が訪問する場合、どれくらいの頻度が適切だと思いますか？」についての結果は図3の通りとなった。「月1回」の訪問を期待しているのが

過半数を占めていた。

### 2) 巡回相談に期待すること

巡回相談有りの園と巡回相談無しの園ともに、「障害を持つ子どもや発達、行動が気になる子と保護者の支援を含めた、あなたが保育者として働く上で巡回相談に期待することは何ですか？」についての結果は、表2にまとめた。

### 3) 巡回相談に対する自由回答

巡回相談有りの園と巡回相談無しの園ともに、「その他、巡回相談や発達支援に関してご意見がございましたら、ご自由にお書き下さい。」についての結果は、表3にまとめた。

## IV 考察

### 1. フェイスシート結果について

フェイスシートの結果より、最も多かったのが20代前半、勤務歴も3年以内が半数と、新任の保育者が多いことがうかがえる。先行研究では、約半数の保育園及び幼稚園において、過去3年に退職した新卒保育者が存在し、このうち保育所の81%、幼稚園の63%に在職期間3年未満の退職者が存在していた(加藤・鈴木, 2011)。在職期間3年未満の早期離職の背景としては、

表2 巡回相談に期待すること

カテゴリー名	回答数 (巡回相談有り・巡回相談無し)	具体例	
		巡回相談有り	巡回相談無し
1. 全般的・専門的な アドバイス	(15・10)	「専門的な解釈や、そこから考えられる援助」	「その子に合った適切なアドバイス」
		「客観的に集団の中にあるその子の姿」	「園内で解決できない点を解決に導いて欲しい」
2. 子どもへの対応	(20・5)	「その子に対する対応の仕方や援助の方法」	「その子に合った対応を具体的に教えて欲しい」
		「子どもの関わり方を指導して欲しい」	「その子が子どもらしくいられるような環境や関わりに対する援助」
3. 保護者への対応	(14・5)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">                     コンサルテーション                      「保護者への対応の仕方」                      「保護者への声掛けの仕方など細かく指導して欲しい」                 </div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">                     コンサルテーション                      「子どもや保護者など対応の仕方のアドバイスがもらえること」                 </div>
		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">                     直接的な支援                      「保護者が気軽に相談できる場づくり」                      「保護者のケア」                 </div>	「担任だけでなく、保護者とも子どもについて考えていけるような繋がりが」
4. 保育者への対応	(4・11)	「担任の悩みや疑問の解決」	「気持ちに寄り添って欲しい」
		「その子が困っていることを巡回相談に聞いて対応する」	「悩みやストレスの軽減」
5. 特別支援の知識と技術	(8・4)	「障害をもつ子どもの発達を促すためにできることのアドバイス」	「気になる子どもに対する接し方を教えて欲しい」
		「障害に合った関わり方を教えて頂けること」	「気になる子どもがいたら、どのように対応するべきか、どのように環境を整えたらよいかを教えてください」
6. 他機関との連携	(3・1)	「他機関へつなげていくこと」	「専門機関の紹介」
		「療育へつなげてあげられること」	
7. 巡回相談のあり方	(2・0)	「継続的支援」	
		「区外在住の子どもでも園に通っている子には、他区同士が連携をとり、巡回訪問できるようになると良いと思います」	
8. 就学前サポート	(0・2)		「小学校に進級する際に、今のうちにやっておくことは何か」
			「目指す子どもの姿の、園での一致(進級時にどうなっていたら良いか)」

「仕事への適性のなさ」や「健康上の理由」があげられている。

また、指定保育士養成施設卒業生の卒業後の動向に関する調査からは、卒業2年目で

18.4%が異なる職場に勤務している（社団法人全国保育士養成協議会，2009）。保育職の経験はあるが、現在は保育職場以外で就業している者の割合も年数が経つにした

表3 巡回相談や発達支援に関する自由回答

カテゴリー名	具体例
1. 専門的な視点や助言	「専門的な面から見てのアドバイスが欲しい」
2. 巡回時間・巡回場を増やして欲しい	巡回の頻度や時間、活動内容によっても、様子は様々なので、もっといろいろな姿をみてもらいたいです
3. 発達に関する説明・診断への関わり	発達の詳しい検査や診断について教えて頂きたい
4. 巡回相談を受けるための待ち時間が長い	巡回相談や発達支援の場が少なく、そして定員がいっぱいで他の子が見てもらうまでに時間がかかる。こういった場がもっと増えていけばとてもうれしい。
5. 気軽に相談したい	巡回相談の先生方が少なく、ご多忙なので気軽に相談したり、巡回に来てもらうことができない。
6. 「様子見」と言われて困ってしまう	巡回にかけたとしても「様子見」のまま流されることも多く、解決に至らないことも多い
7. 謝辞	具体的なアドバイスを頂いているのでありがたく感じています
8. その他	発達の支援の研修や、各市をお願いをし、巡回相談を行っていることで、少しずつ園全体の理解へとつながっていると感じてはいますが、やはりまだまだ対応、支援の仕方などで問題が多く、特に保護者への対応は苦戦しています。ただ苦戦はしている中でも、保育者一人ひとりの意識も変化しつつありますので、今度も巡回相談を活用し、多くの学びを得たいと思っています。

がって増加しており、保育職の離職理由の特徴として、「職場の人間関係」、「心身の不調」、「自分の仕事に自信がなくなった」があげられている（社団法人全国保育士養成協議会，2010）。

以上のことから、保育者が継続的に就業を行うことの困難さは、就業環境における現状の課題であると考えられる。また、早期離職に加え、退職後に保育職場以外で就業している割合が高いことは、30代以降の保育者が少ないことに関係していると推察される。よって、本研究で得られた結果は保育者の現状に相当するものと考えられる。

よって今回の調査は、大半が女性であ

り、勤務経験が浅く、若い年齢層の保育者であったといえる。

## 2. 園長先生からの回答について

園長先生からの回答より、巡回相談の所有する資格は様々であることがわかった。しかし、3園の園長先生からは資格について把握していないとの回答を得た。園で把握していない理由については確認できていないが、巡回相談の所有する資格を把握することは、子どもへのより良い支援を行ううえで、重要であると考えられる。

また、巡回相談のまた主な関わりとしては、①午前中（1～2時間程度）対象の子ども園の様子を観察、②午後の会議にて「気になる子どもへの関わり方や支援方



法のアドバイス」とどの園も同様の回答であった。文部科学省や厚生労働省等より、巡回相談の定義はなされているが、具体的な業務内容は明記されていない。今回の調査より、巡回相談の関わり方の実態を把握することができたと考えられる。なお、「保護者への直接的な支援」を望む保育者は多数いたが、実際に行っていた園は1園のみであった。

### 3. 巡回相談の有無と保育者ストレスの関係について

巡回相談の有無による尺度得点の差を分析した。結果より、巡回相談の有無によって下位尺度の「子どもの対応・理解のストレス」得点に有意な差がみられた。これは、定義として用いた「巡回訪問を制度面・実態面から捉えるもの」、また、園長先生に回答して頂いた「巡回相談の主な関わり方」に相当すると考えられる。これらより、巡回相談員が「子どもの対応・理解」について関わることで、保育者ストレスが軽減することが推察される。

### 4. 巡回相談の頻度と保育者ストレスの関係について

頻度としては、半年に1回以上の訪問により保育者ストレスが変化するという結果となった。今回の調査を行った際、半年に1回の園でも、1か月前に巡回相談が訪問したという園もあった。頻度を調査するにあたって、質問紙の配布時期や調査方法は、より考慮すべき点であったと考えられる。

しかし、有意な変化とはいえないが、頻度が増えるごとに平均値が下がっていたことや、巡回相談無しの園のうち半数以上が「月1回」の頻度を期待することは、重視

すべき点である。

### 5. 巡回相談の認知度

巡回相談無しの園には、以下の質問の前に巡回相談についての説明を行った。その説明を踏まえて、巡回相談について知っていたか尋ねた結果、半数以上の保育者が巡回相談を認知していないことがわかった。保育者自身が利用できる支援機関を知り得ることは、非常に重要なことであると考えられる。

また図3より、巡回相談無しの園に巡回相談の希望頻度について尋ねた結果、「月1回」以上の訪問を希望している保育者が7割であった。これより、巡回相談の利用を望む保育者が多く存在すると推察される。

### 6. 巡回相談に対して期待すること

#### 1) 巡回相談の有無による「期待すること」の比較

表2に示した「期待すること」から、巡回相談の有無による比較を行った。これより、カテゴリーごとの回答数の差を検討した。両者とも回答のあったカテゴリーでは、「保育者への対応」以外は全て巡回相談有りの園のほうが回答が多かった。巡回相談無しの園では巡回相談の認知度が低かったことから、実際に支援を受けストレスの軽減がみられた巡回相談有りのほうが、期待値が高いため回答数が多かったと推察される。なお、「保育者への対応」が巡回相談無しのほうが回答が多かったことに関しては、回答例でもあげたように、「担当の悩みや疑問の解決」、「気持ちに寄り添ってほしい」など、両者ともに具体的な内容というよりも全般的に期待を示す回答が多いことがうかがえた。認知度の低さや実際

に支援を受けている経験の差から、巡回相談有りの園よりもこのカテゴリへの回答数が多かったことが考えられる。

## 2) 巡回相談の有無による回答内容の比較

巡回相談の有無により、期待することの回答内容に異なる点がいくつかみられた。まず、「保護者への対応」についてである。どちらの園にも、コンサルテーションとしての役割を期待しているが、巡回相談有りの園に対しては保護者への直接的な支援も期待していた。保育者より、「対象児について、その保護者に説明する際、関係性が壊れることを懸念している」という発言があった。コンサルテーションだけでは補えない部分を、巡回相談が直接関わり支援を行うことを期待していると考えられる。

次に「特別支援の知識と技術」についてである。巡回相談有りの園では「障害をもつ子ども」と回答し、巡回相談無しの園では「気になる子ども」と回答していた。これより、巡回相談有りの園では、介入によって「気になる子ども」の支援はすでに開始されていると考えられる。そのため、より重度の子どもを、専門的に見てもらうことに期待していると推察される。

最後に「就学前サポート」についてである。このカテゴリは巡回相談無しの園のみ回答があった。巡回相談有りの園では、就学前サポートを受けているという発言が多数上がっていた。よって、巡回相談有りの園において、期待することとしては解消されたカテゴリであると考えられる。

## 7. 巡回相談に対する自由回答

表3は、巡回相談に対する自由回答をカテゴリ分けしたものになる。表2と類似

するカテゴリはあるが、異なるものとして「巡回時間・巡回場を増やしてほしい」があげられていた。園長先生の回答より、巡回相談の主な関わり方は午前中の観察となっていた。しかし、結果より気になる子どもの姿は様々であることや、活動場面によって異なることがうかがえた。これより、巡回時間・場面の多様化が必要であると考えられる。

## V 総合考察

### 1. 本研究の成果

#### 1) 巡回相談の意義

本研究より、巡回相談有りの園のほうが保育者の「子どもの対応・理解のストレス」は低いことが明らかとなった。巡回相談の定義に基づいた活動が成されており、有効的な結果をもたらしていると推察される。実際に保育者は働くなかで、気になる子どもの対応や保護者との関わり方に、困難さやストレスを抱えていた。そのような保育者に対して巡回相談が介入し支援を行うことで、円滑な子どもへの関わりや保護者対応が行えるようになり、保育者のストレスは解消または軽減する。またこれは、子どもたちがより良い生活を送るための、間接的な支援になっていると考えられる。

なお、良好な支援として保育者からあげられている具体的な内容として、第1に「全般的・専門的なアドバイス」があった。巡回相談に求められる専門性や客観的な視点を保育者に提示することは、保育者のストレスの軽減に有効であることが示された。

第2に「保育者間での情報共有」である。園長先生の回答より、子どもの観察後

に巡回相談と保育者で会議を行い、子どもの見立てと手立てについての情報が共有されていることが、巡回相談有りの園全てからうかがえた。現状、巡回相談の業務内容は定義のように明記されていないが、どの園も行っているこのような会議は、保育者間での情報共有のために今後も継続して行うべき支援だと考えられる。

## 2) 巡回相談において考えられる課題

第1に「巡回頻度の増加」である。結果より、有意な差がみられたのは半年に1回以上の訪問であった。しかし、保育者の回答より月1回の頻度や定期的な訪問に対して、ポジティブな印象や期待をもっていることがみられた。月1回程度の訪問は、気になる子どもを捉えるうえで適正な頻度であると推察される。また巡回相談に対する意見から、様子見と言われる、気軽に相談したいという語りがみられた。巡回相談の人員不足により、巡回相談1人が担当する園数は多く、結果的に十分な支援がなされていないことがうかがえる。これらを改善していくためには、まず「巡回相談の人員増加」を行い、十分な支援が行える時間を確保することが必要であると考えられる。人員の増加を行うことで、「巡回頻度の増加」に繋げられると推察される。

第2に「保護者への対応」である。浜谷(2005)の定義でも述べられている、コンサルテーションとしての役割を保護者対応においても求めていることが結果より明らかとなった。また、保護者への直接的な支援を求めている語りがみられた。子どもへのより良い支援を行うためには、保護者の協力が必要である。保護者との関係による困難さを軽減するためには、巡回相談によ

る直接的な支援が必要であり、その必要性は今後も高まっていくと考えられる。

第3に「巡回形態の多様化」である。巡回相談に対する意見から、巡回時間・場面を増やしてほしい、という語りがみられた。園長先生の回答より、巡回相談が観察をする時間帯は午前中がほとんどであったが、保育者が気になる子どもの姿は様々であり、登下校や午睡の場面など、午前中の観察だけでは把握しきれないことが多くあると推察される。これより、「巡回形態の多様化」を行うことで、対象児のニーズに合ったより良い支援が可能になると考えられる。

最後に「巡回相談の認知度」である。結果より、巡回相談無しの園の保育者のうち、半数以上は巡回相談の存在を認知していないことが明らかとなった。これより、巡回相談を認知してもらうための活動が、今後重要になってくると考えられる。また園長先生の回答からも、巡回相談の資格について回答無しの園が3園あった。巡回相談の有する資格や専門を園に提示することは、子どもにより良い支援を行うために重要であると考えられる。以上より、「巡回相談の認知度」を高めることは園での活用に繋がり、また巡回相談が保育者にとってより身近なものになることは、保育者の精神健康状態を良好にするための重要な課題であると推察される。

## 2. 本研究の限界と今後の展望

### 1) 限界と課題

第1に「調査範囲の限定」があげられる。本研究では、関東圏内の幼稚園及び保育園に限定して調査を行った。また調査協力者の内訳より、保育士のほうが幼稚園教

論より多く回答が得られた。巡回相有りの園のほうが保育者ストレスが低いという結果が見出された。しかし、全国的な共通する結果であるとは言えない。限定された条件において見出されたひとつの仮説であることに留意すべきである。

第2に「巡回相談の頻度」があげられる。頻度ごとの人数の内訳をみると、月1回の園は23名、月4回の園は6名など、頻度によって人数の差が大きくみられた。この人数差は本研究の結果にも影響していると考えられる。比較をする際、同一のデータ量で行うことがより正確な結果を見出すために必要であろう。また頻度の分析より、月1回の訪問を求める保育者が多いことに反して、半年に1回以上の訪問で有意な差がみられる結果となった。今回の調査を行った際、半年に1回の園でも、1か月前に巡回相談から支援を受けたという園もあった。頻度を調査するにあたって、質問紙の配布時期や調査方法は、より考慮すべき点であったと考えられる。

これより課題として、より広範囲にわたり調査を行い、共通する部分や異なる部分を明らかにすることが重要であろう。また頻度においては、巡回相談が園に介入する前後で調査を行う必要があるとされる。介入による変化の検討は、巡回相談の関わりにおいてより深い結果が得られると推察される。

## 2) 本研究における今後の展望

本研究は、巡回相談と保育者ストレスの関係性を検討することを目的とした。その結果、巡回相談の有りの園のほうが保育者ストレスが低いことが挙げられる。定義が様々であることや、具体的な業務内容は明

記されていないが、巡回相談の関わりは保育者にとってポジティブな影響を与えていることが明らかとなった。

今後、見出された巡回相談に対する要望や課題を改善していくことで、保育者にとって巡回相談が役立つ支援体制となることを期待したい。

## 謝辞

本論文を作成するにあたり、指導教員の松寄くみ子教授から、丁寧かつ熱心なご指導を賜りました。ここに感謝の意を表します。また、質問紙の配布・回答、及びインタビューへの協力してくださった皆様に感謝致します。

## 引用文献

- 安達隆 (2001). 保育労働者の労働と健康をまもる対策 (特集 保育労働者の安全衛生活動) 労働と医学, 70, 20-25.
- 赤田太郎・滋野井一博・小正浩徳・友久久雄 (2009). 保育士のストレス要因と保育の労働環境に関する研究—身体的苦痛のストレス, 保育上のストレス, 家族関係のストレス, 精神的健康状態, 満足度を通して— 龍谷大学教育学会紀要, 8, 35-51.
- 赤田太郎 (2010). 保育士ストレス評定尺度の作成と信頼性妥当性の検討 心理学研究, 81, 158-166.
- 浜谷直人・松山由紀・秦野悦子・村田町子 (1990). 障害児保育における専門機関との連携—川崎市における障害児保育巡回相談のとりくみの視点と特徴— 全国障害者問題研究会, 60, 42-53.
- 浜谷直人 (2005). 巡回相談はどのように



- 障害児統合保育を支援するか—発達臨床コンサルテーションの支援モデル  
発達心理学研究, 16(3), 300-310.
- 北城高広 (2009). 教師のストレスと心身の健康に関する調査研究(2)—OK  
グラムと教師のストレス及びバー  
ンアウトとの関連について— 青森県  
総合学校教育センター研究紀要, 1-  
10.
- 五十嵐元子 (2010). 首都圏における巡回  
相談のシステムの状況について 白梅  
学園大学・短期大学教育・福祉研究セ  
ンター研究年報, 15, 25-30.
- 石川洋子・井上清子 (2010). 保育士のス  
トレスに関する研究(1)—職場のスト  
レスとその解消—文教大学教育学部紀  
要, 44, 113-120.
- 近藤直子・白石恵理子・張貞京・藤野友  
紀・松原巨子 (2001). 自治体におけ  
る障害乳幼児施策の実態 障害者問題  
研究, 29(2), 96-123.
- 厚生労働省 (2017). 発達障害者支援施策  
の概要  
<[http://www.mhlw.go.jp/bunya/  
shougaihoven/hattatsu/gaiyo.html](http://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoven/hattatsu/gaiyo.html)>  
(2017年12月)
- 文部科学省 (2015). 平成27年度特別支援  
教育体制整備状況調査結果について  
<[http://www.mext.go.jp/component  
/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_\\_  
icsFiles/afiedfile/2017/04/07/  
1383638\\_02.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afiedfile/2017/04/07/1383638_02.pdf)> (2017年4月)
- 文部科学省 (2016). 平成28年度特別支援  
教育体制整備状況調査結果について  
<[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/  
shotou/tokubetu/material/\\_\\_\\_icsFiles/  
afiedfile/2017/04/07/1383567\\_02.  
pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/___icsFiles/afiedfile/2017/04/07/1383567_02.pdf)> (2017年4月)
- 文部科学省 (2016). 学校教員統計調査—  
平成28年度(中間報告)結果の概要—  
<[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/  
toukei/chousa01/kyouin/kekka/k\\_  
detail/1395309.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kyouin/kekka/k_detail/1395309.htm)> (2017年12月)
- 島崎博嗣・浅田精利・森昭三・都築淳・扇  
原淳 (1996). 保育者の精神健康と保  
育行動—保育者の精神的健康が幼児へ  
の応答的行動に及ぼす影響— 研究助  
成論文集, 32, 133-140.
- 園山繁樹・由岐中佳代子 (2000). 保育所  
における障害児保育の実施状況と支援  
体制の検討—療育のある統合保育に向  
けての課題 社会福祉学, 41, 61-70.
- 社団法人全国保育士養成協議会 (2009).  
「指定保育士養成施設卒業生の卒後の  
動向及び業務の実態に関する調査」報  
告書Ⅰ—調査結果の概要— 保育士養  
成資料集, 第50号
- 社団法人全国保育士養成協議会 (2010).  
「指定保育士養成施設卒業生の卒後の  
動向及び業務の実態に関する調査」報  
告書Ⅱ—調査結果からの展開— 保育  
士養成資料集, 第52号
- 鶴宏史 (2012). 保育所・幼稚園における  
巡回相談に関する研究動向 帝塚山大  
学現代生活学部紀要, 8, 113-126.
- 宇佐美壽子・西智子・高尾公矢 (2015).  
保育者のストレスに関する研究—女性  
企業従業員との比較検討— 聖徳大学  
研究紀要, 26, 1-7.
- 山城真紀子・上地重矢子・嘉数朝子  
(2005). 沖縄県の保育者の職業スト  
レスと健康についての研究Ⅱ—公立保

育所と認可保育所を対象に— 琉球大  
学教育学部紀要, 69, 207-215.

全障研障害乳幼児施策全国実態調査委員会  
(2001). 自治体における障害乳幼児  
施策の実態 障害者問題研究, 29  
(2), 96-123.